富山大学教育学部紀要 №59：51－64（平成17年）

東北日本とその周辺の地方霊場と寺社分布

田　上　善　夫

（2004年10月20日受理）

The Local Sacred Places and the Distribution of Temples and Shrines in and around the Northeastern Japan

Yoshio TAGAMI

E-mail：tagami@edu.toyama-u.ac.jp

Abstract

In this study, the landscapes of local sacred places were surveyed in and around northeastern Japan. Moreover, the distribution of prominent shrines and sects of temples was compared with that of sacred places. Furthermore, the complex characters of sacred places were examined on the basis of the distribution comparison. The main results are as follows. 1) In the Hokuriku district, the sacred places are on mountains, borders of domain, feet of mountains, and seashores. Their sacred points are seen in the branch of a worship way, the mound on the seashore, small islands and the ridge of hills, etc. 2) In the Tohoku district, sacred places are on the summits of hills in plain areas. And their sacred points are often in the shrines and temples of asceticism. Sacred places are also in city areas, and those sacred points are located on the edges of heights. 3) In Edo/Tokyo, many sacred points are seen on the southern slopes of valleys on the eastern side of Musashino plateau. Their sacred places are related to the temple areas which were formed during the city construction. 4) In and around northeastern Japan, sacred places are connected with a specified prominent shrine, especially Kumano. 5) In and around northeastern Japan, sacred places are also connected with specified temple sects, especially Shingon and Zen. 6) The temple distribution was influenced by the relief of the areas, which also affected the sacred places. 7) In the early recent times, castle towns expanded and the temple areas were formed in suburbs. They became the main sacred place in the city. 8) The sacred points were located at the feet of mountains, hills, etc., and they became the foundation of sacred places. In these areas, temples of Tendai sect, Shingon sect, or training places of asceticism were established and chosen as the sacred place. Furthermore, sacred places were changed by the city construction. Also, the local community was concerned with the pilgrimage on the sacred places. The life on earth was considered very important by temples and pilgrims to the sacred places.

キーワード：霊場，寺院，神社，北陸，東北日本

Key words：sacred place, temple, shrine, Hokuriku, Northeastern Japan

Ⅰ　はじめに

西国三十三ヶ所や四国八十八ヶ所をはじめとして，全国各地に霊場が開創され，巡拝されている(田上善夫，2003a)。富山県各地にも，寺院や路傍の石仏などを巡る地域の霊場がある(田上善夫，2004c)。地方霊場の多くは，中世以降近世を中心に開創され，さらに新たな開創が続いている(田上善夫，2003b)。また地方霊場の種類，開創年代，範囲，巡拝路の形態，また霊場数や霊場密度などは，さまざまである(田上善夫，2004a)。

こうした地方霊場の札所には，特定の著名神社や宗派寺院が多くみられる。札所の地は古くより霊地とされ，山岳の岩，森，水などに臨むことが多い。霊場は仏教，とくに密教に由来するが，神仏習合や山岳信仰を介して神道や修験道もかかわり，さらに祖先崇拝や民間信仰も影響している(田上善夫，2004b)。

そのため地方霊場は，地域の自然的基盤の上に，先に成立した霊地・社寺の地において，民間信仰を含めた諸信仰にもとづいて，開創かつ巡拝されているものとみることができる。地方霊場が地域のさまざまな要素から構成されるのであれば，地方霊場にもとづいて，景観ないしは地域の自然・社会・文化・信仰等々の複合を，捉えられると考えられる。

本論では，地方霊場の諸相が類似した，北海道・東北地方に関東・北陸地方を加えた，東北日本とその周辺において，地方霊場について，関連の深い寺社分布を通して，明らかにする。まず，さまざまな地形上にある地方霊場を選び，札所のおかれた位置などについて，現地調査を行う。次に，現在の宗教法人の著名神社および主要宗派寺院について分布を示し，その成立の経緯などにもとづいて，霊場開創地域の諸基盤について検討する。さらに，それらを通して，地方霊場開創地の景観等について分析を試みる。

Ⅱ　地方霊場とその景観

1．北陸地方

立山参詣路の三十三観音

富山県中新川郡立山町岩峅寺からの立山禅定路には，石仏47体，宝篋印塔7基などがみられる。その中の西国三十三観音は，文化八(1811)年に安置された(図1)(立山町，1984)。

この三十三観音は，岩峅寺から芦峅寺を経て千寿ヶ原まで，常願寺川右岸に沿う。川沿い最奥の位置(標高450m)に安置される第13番観音は，かつて藤橋の渡り際の高地にあったが，バスセンター裏を経て，現在の立山駅前に移されたという。立山火山からの火砕流台地の先端(標高980m)にある美女平駅付近に，第17番観音がある。石柱をくりぬき，高さ30cmほどに浮き彫りされ，外周はコンクリート壁で覆われている。この17番は，33観音の中央にあたる。

第17番以降は台地上に安置されるが，第21番聖観音は称名の滝見台(1270m)に，第25番十一面千手観音は七曲の急坂上方(1780m)に，さらに第26番聖観音は獅子ヶ鼻方面への分岐の追分(1840m)に，というように，禅定道の要所に安置される(図2)。同様にして，第28番聖観音は弥陀ヶ原バス停付近(1940m)に，第29番馬頭観音は鏡石(2230m)に安置される。

最も高い位置にあるのは第32番千手千眼観音で，室堂平にある室堂小屋脇(2450m)に，立山を背にして安置される。なお第33番観音は室堂小屋から東に降った位置にあるが，現在は立ち入れない。

この三十三観音が安置された後，安政五(1858)年六・七月には6,000〜7,000人が立山参詣をしたという。芦峅寺を早朝に出，藤橋で称名川を渡って千手ヶ平で千手堂の観音を拝し，材木坂を登って鷲ヶ窟，大小屋を経て勝妙滝を望み，鍬崎堂の聖観音を拝し，桑ヶ谷の仮小屋で中食を摂った。その後不動堂，湯之道分岐の地蔵，うばがふところ道分岐の中津原堂を経て阿弥陀ヶ原を横切り，獅子ヶ鼻，鏡石を経て室堂に宿泊した(立山町，1977)。三十三観音は現在の道沿いに安置され，旧来の位置から移動しているようであるが，とくに橋詰や分岐，また難所などに位置し，道程の重要な道標となっている。なお第1番および第33番の位置は必ずしも明らかでなく，その意味も不明である。

越中・越後境と新西国三十三観音

北陸本線の越中宮崎駅から東では，北アルプスの北端が海岸にせまり，越中と越後の国境となる。この地に，新西国三十三(東越)観音霊場第15番仁王山護国寺がある(図3)。北向斜面30m上方の護国寺本堂には，聖観音をはじめ如来，大師，さらに極彩色の七観音がまつられる。

この三十三観音をまわる人は，たまにいる程度だという。細入村8人，富山市1人，大沢野町1人の，平成11年6月吉日の納札が残る。下新川郡宇奈月町明日の法福寺や魚津市小川寺の千光寺を巡る越中一国三十三観音霊場が大きい西国といわれるのに対して，この越中東部の新西国三十三観音は小さい新西国といわれている。開創は昭和初めで，藩政期の越中三十三観音より新しい。開創70周年を記念して，平成16(2004)年4月に富山県民会館で，瀬戸内寂聴の

招待講演や三十三寺寄合の法事が，1200人を集めて行われたという。

さらにこの護国寺は，越中八十八所の第82番であった。ただし現在，八十八所は廻られていない。また別棟に五大力明王尊がまつられており，近年開創された北陸不動霊場第23番となっている。この不動霊場を巡る人は多いという。

このように護国寺が多くの霊場札所であるのは，この地が国境にあって，交通の要衝であることが一因である。護国寺の境内下には，元治元(1864)年には知行高2050石の奉行をはじめ計57人をかかえる，越中最大の境の関所があった。ここで他国への巡礼が規制されたため，新川郡の女どもで善光寺や甲州身延山へ参詣する者は，大聖寺から上方経由で東山道を通っていたが，文政元(1818)年より新川郡奉行の手形があれば通れるようになったという。

関所が設けられたのは狭隘な地形によるが，急峻な地形は諸仏をまつり，霊場にもふさわしい。護国寺には渓流・滝があるが，新西国霊場は，「立山信仰と名水めぐり」とも案内されている。また護国寺に隣接して境神社があり，その境内には金刀比羅大神石碑も祀られる。さらに境の関の東，越後の市振の関との間には，「玉の木観音八十八ヶ所」もおかれている。

端山の船峅山三十三観音

上新川郡大沢野町寺家では，船峅野面の南東端にある姉倉比咩神社と隣接する帝龍寺に，船峅山三十三観音が昭和5年に開創されている(図4)。この船峅山三十三観音は，西国三十三観音の写しである。観音はいずれも高さ30cmほどの石像で，石龕内の台座に安置される。各観音は裳が赤，上衣が青，光背や冠が黄に彩色され，札所名や御詠歌も記されている。姉倉比咩神社境内の第1番から，東に続く尾根を最高所の第20番へ100mほど上り，南側の尾根を再び帝龍寺にある第33番まで降りてくる。

この三十三観音霊場は，集落に隣接する端山にある。当地の寺社は，きわめて近い関係にある。また付近には，飛騨から神通川に沿って北に延びる立山参道が，大沢野町笹津から直坂を上って通り，船峅面上の坂本，万願寺を経て，小黒にぬける(立山町，1977)。ただし先述の立山参詣路の三十三観音との関連は不明である。

小島・小丘の能登三十三観音

能登三十三観音霊場は，能登の当国(一国)霊場で，半島の海岸と邑知潟平野をめぐる(図5)。米林勝二により，羽咋郡富来町の第26番大福寺から，元禄十(1697)年の能登当国三十三ヶ所巡礼札が見出されており(山瀬晋吾，1995)，開創は江戸初に遡る。

鳳至郡穴水町にある第1番白雉山明泉寺は，白雉三(652)年の開創と伝えられ，境内に高さ7mの石造五重塔や鎌倉・室町期の宝篋印塔，五輪塔，板碑などの石塔群が残る。現在は高野山真言宗で，近年開創の北陸三十三観音第18番，北陸三十六不動第8番でもある。能登でも有数の古刹で，他の札所と異なり海岸から1kmほど内陸に位置する。

札所の多くは海岸にある。まず第2番上田寺，観音堂は，明泉寺から川下の海岸に隣接の若宮八幡とともに位置している。鹿島郡田鶴浜町にある第22番はかつて白浜村牛ヶ鼻の長谷ノ観音といわれ，現在は海岸線から100mほどの高さ20mほどの小丘上に安置される(図6)。御詠歌に「けさみればおきのおふねのみだれさお ささねどなみによるうしがはな」とあるように，波打ち際にあったようである。さらに七尾市街の北西，鞍馬山(60m)の南東山麓にある第7番小嶋山妙観院は，観音堂が高さ約20mの小丘上にあるが，古くは城山の牛ヶ首にあり，明治末までは海中の孤島であったという。高野山真言宗で，聖観音をはじめそうめん不動がまつられ，北陸三十三観音第19番，北陸三十六不動第9番，七尾二十四地蔵第1番でもある。また周辺は山の寺寺院郡とよばれ，前田利家の差配に始まり，日蓮系8，曹洞宗4，浄土宗3，真言系1の16寺が残るが，北陸に多い浄土真宗寺院はない。春・秋にバスで団体が来るが，名古屋・岐阜方面からが多いという。

また鹿島郡鹿島町の碁石ヶ峰山麓に，第11番正霊寺がある。海岸ではないが邑知潟平野から南に斜面を上り，比高20mほどの小丘上にあって，住吉神社が隣接するなど，他と類似する。

なお，鳳至郡穴水町中居南でも，七尾北湾奥の小丘上に，一群の寺社がある。能登観音霊場の札所ではないが，中居観音講の塔が建てられ，岐阜の谷汲山に安置されていた空也上人作の十一面観音が，美濃の安泰寺を経て，文久二(1862)年にこの地に祀られたという。ここの日吉山王権現は，奥津比咩神社，

神明社の合祀により，大山昨命，田心比咩命，市杵島姫命，端津比咩命，天照大神，豊受大神を祀る。同じく日吉山医王院は，高野山真言宗で薬師如来をまつるが，奥津比咩神社の本地は薬師如来といわれる。日吉山王権現には海から参道が続いている。すなわちこの小丘上では，日吉・奥津比咩・神明および観音・薬師が，複雑に神神・神仏習合している。また小丘の南縁は神明ヶ鼻とよばれるように寺社とかかわりの深い地であるが，能登十二薬師霊場の第5番である中居薬師堂もこの地を示すと考えられる。なお，鳳至郡穴水町甲の円山(57m)も海岸にある小丘で，頂に加夫刀比古神社が鎮座するが，能登十二薬師第6番の甲山薬師は，ここに位置したと考えられる。

2．東北地方

東北地方の太平洋側に，多くの地方観音霊場があり，残された納札から開創は中世に遡ることが知られる。福島県の中通り，山道にある仙道三十三観音は明応七(1498)年，いわき市から北に双葉郡富岡町におよぶ岩城三十三観音は永正十八(1521)年，後述の奥州三十三観音は天文十三(1544)年，岩手県北部から青森県南部にわたる糠部郡三十三観音は永正九(1512)年である(藤田定興，1997)。

近世にも多くの霊場が，開創あるいは再興された。北上川中流の奥羽三十三番札所は享保十二(1727)年，当国三十三所(和賀・稗貫・志和三郡三十三所)は享保三(1718)年，江刺三十三所は享保年間(1716-35)，気仙三十三所は享保初(1716)，仙北三十三所は宝永年間(1704-10)である(嶋　二郎，1999)。

里山上の奥州三十三観音

奥州三十三観音は福島・宮城・岩手の3県にわたり，上述の霊場中で最も広域におよぶ。その主要部は，仙台平野にある(図7)。札所にはこの霊場の特色が端的に示されている。

名取市高舘吉田にある第1番那智山紹楽寺は，高舘山にある熊野三山神社の別当寺である。本来の観音堂は，高舘山(201m)の頂付近，杉木立の中にたたずむ。貼られた納札は，石巻，上州，野州，東京・埼玉におよぶ。観音堂に隣接する那智熊野神社境内には，高舘，愛宕，秋葉，八幡などの石碑が祀られる。下った標高150m付近の渓谷中に落差数mの那智の瀧があり，熊野飛龍神社が祀られ，また湯殿山神社の石碑などが並ぶ。この那智の瀧は，以前は不動の瀧と呼ばれ，修験寺院があって，奥の院であったという。

すなわち本来，一山が神仏習合の修験寺院，修行場である。近辺の第2番天苗山秀麓斎も熊野三山の別当寺，第3番川上観音堂も熊野三山別当寺の熊野山新宮寺(金剛寺)が管理する。すなわちこの地に熊野三山また羽黒三山が写され，さらに西国霊場が写されたことを示している。なお，第2番天苗山秀麓斎は，坂上田村麻呂が滅ぼした石巻牧山の魔鬼氏を慰めるために，清水寺の観音を勧請し，戦勝と天下太平を祈願した天台宗寺院で，曹洞宗として再興されたという。清水寺は西国霊場としてではなく，坂上田村麻呂の縁での勧請であり，熊野三山信仰以前の観音信仰を示している。

同様の立地は，宮城郡松島町の第7番富春山大仰寺にみられる。仙台市の東北方に，松島湾を取り囲むように，小高い山が続く中に，富山(117m)がある。松島湾を一望する地に，石の基壇に朱塗り，方三間の富山観音がある。延暦二十一(802)年に鎮守府を多賀城から胆沢城に移した坂上田村麻呂が，国家鎮護を祈って建立したと伝えられる。富山観音には熊野大権現も祀られており，三陸三十三観音の第3番でもある。

さらに石巻市の第8番両峰山梅渓寺も，旧北上川東岸の牧山(255m)に位置し，牧山観音といわれる。札所はかつて牧山山頂の鷲峰山長禅寺にあり，同寺は隣接する零羊崎神社の別当寺であった。ここで坂上田村麻呂が魔鬼氏を供養して観音を祀り，国家鎮護，五穀豊穣，海上安全を祈願したといわれる。さらに山内には元三大師堂，秋田の三吉権現，法印が文化五(1808)年に奉納した大乗妙典六十六部日本回国供養塔が建ち，同山開基後の変遷を示している。長禅寺はなお，牡鹿三十三観音の第1番札所でもある。

孤峰の上の立地は，遠田郡涌谷町の第9番無夷山篦峰寺に典型的である。篦岳山(236m)は仙台平野中央にそびえ，西麓から天平二十一(749)年に黄金が発見されている。山頂に白山宮が宝亀元(770)年に，観音堂が大同年間(806-810)年に建立され，また法相宗から天台宗にかわった。なお篦峰寺では本堂は公的な祭祀空間，坊は私的な祭祀空間で，古代の蝦夷退

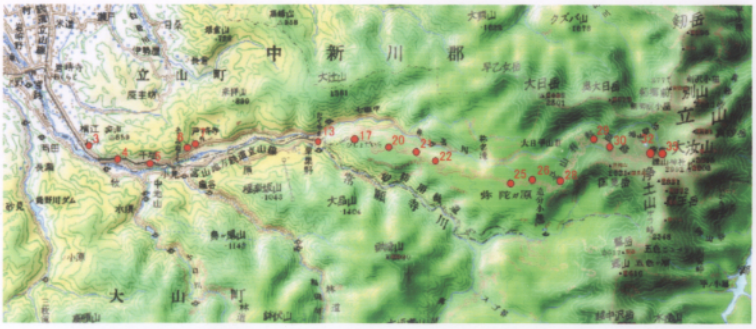


図1　立山参詣路と三十三観音

立山参詣路は岩峅寺から室堂まで十里半といわれ，禅定道，禅定往来ともよばれた。常願寺川の桂台まで，また弥陀ヶ原に三十三観音が安置される。なお本図および図5，7，8，13の背景は「カシミール3D Ver8.2」により作成。

図2　立山第26番聖観音

弥陀ヶ原高原上の参詣路の要所に観音が安置される。松尾峠，獅子ヶ鼻方面に道が分かれる追分に，立山を背にして観音，地蔵がならぶる。

図3　新西国第15番仁王山護国寺

富山県下新川郡朝日町境にあり，聖観音を本尊とする高野山真言宗寺院である。門前には観音石像が並び，急な石段の上の平坦地に位置する。上方に御亭があり，脇の渓流には五大力滝がある。境内には石楠花が植えられ，八十八所や西国三十三所のお砂踏み，十八羅漢，狸や鰐ほかの諸石像が置かれる。

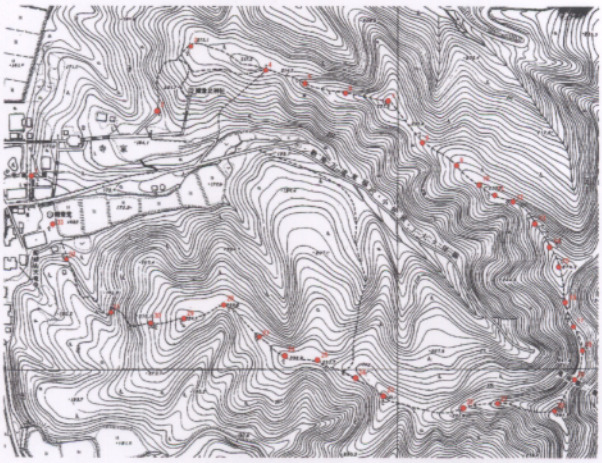


図4　船峅三十三観音霊場

第1番観音は姉倉比咩神社の上り口(標高169m)にある。第2番は奥宮の下(185m)である。第3番からは尾根上(212m)である。尾根上は部分的な鞍部のほか緩傾斜で，第10番(240m)からやや急になり，ピーク(275m)上の第15番から南北の稜線となる。稜線下を東福沢・小佐波・上大久保線のトンネルが通る。第19番だけ西向きに立つ。第20番は最高所(281m)にあり，傍らに十三重の石塔が建つ。位置にある寺家から西方の船峅野，またはるかに八尾の丘陵，医王山を望む位置にある。一帯は檪林で，下草刈された幅1mほどの道が続く。第29番(224m)の先は急傾斜で，第30－31番間は25mの高度差がある。第33番は帝龍寺境内にある。なおベースマップには「大沢野町基本図」を使用した。

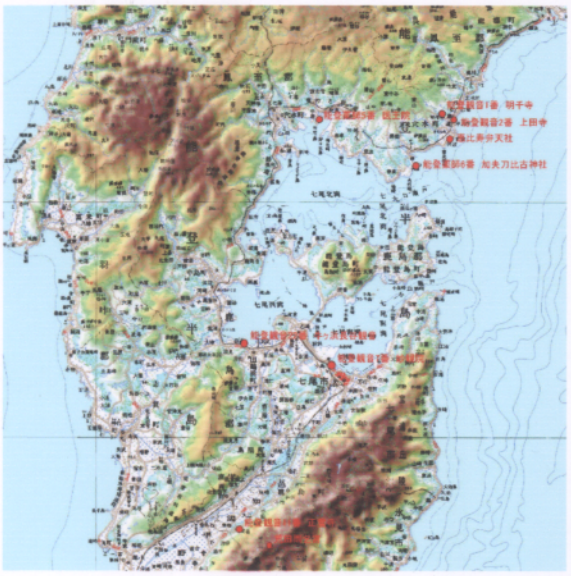


図5　能登の霊場

能登の霊場札所の多くは，海岸に沿って並ぶ。一方，山中にも霊地がある。荒田雨乞いの宮は，富山－石川県境のすぐ南側に位置する。稜線付近には碁石まで，自然歩道石動山が走っている。沢の出会いに30m四方の広場があり，胸高直径1mを超す杉の巨木に二本の注連縄がかけられ，その前に注連縄がかけられた台がある。また杉の下に注連縄がかけられた3m余の大石があり，脇には護摩の火が焚かれた跡がある。

図6 能登三十三観音第22番

石川県鹿島郡田鶴浜町にある。能登では図5に示されるように，海岸沿いに札所が多いが，この22番のように霊地はとくに海岸付近の小山や小島が霊地にある。能登第2番の南方，鳳至郡穴水町前波の恵比寿弁天社も，海中に突き出た小島である。またその付け根にあたる海岸にも小山があって祀られている。

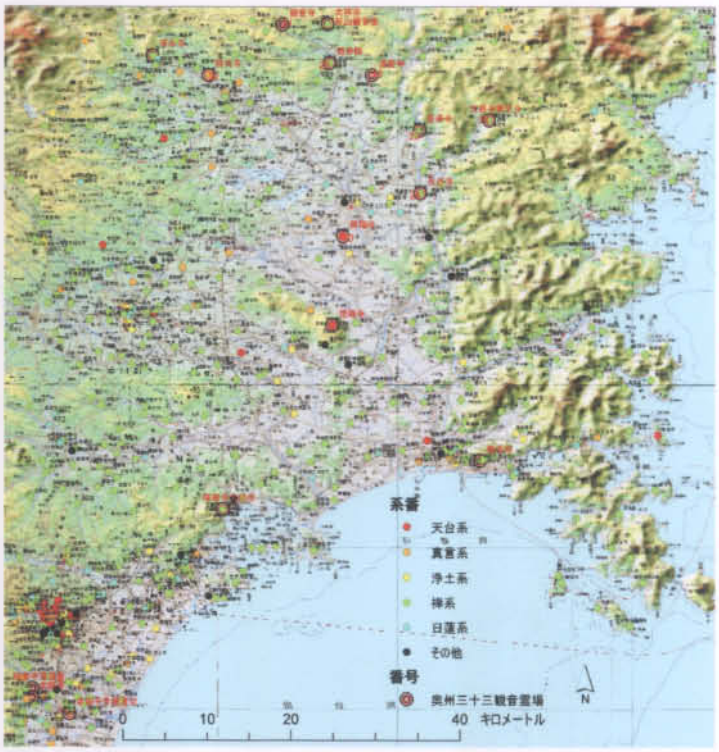


図7 仙台平野周辺の奥州三十三観音と宗派別寺院の分布

仙台平野周辺は奥州三十三観音霊場の札所が多く，また禅系寺院が多い。奥州観音第7，8，9番は奥州三観音とよばれ，坂上田村麻呂が奥州征伐の際に開いたといわれる。三角に配置された三観音を日の出から日の入りまでに参る習わしがあり，とくに戦，受験，選挙，病気などのときに祈願される。第7番富山の千手観音は一寸八分の大きさで，他の二観音にも三分されたものが祀られているといわれる。奥州三観音や三十三観音は伊達の頃に始まると考えられている。

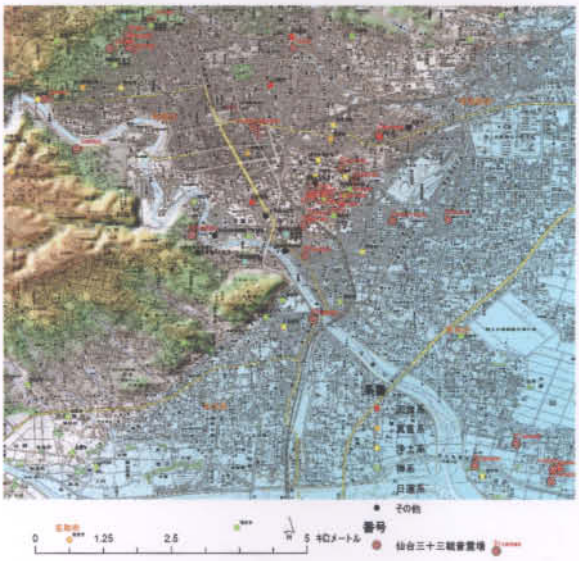


図8 仙台三十三観音と仙台七観音

仙台三十三観音は仙台市街を中心としている。仙台七観音はやや広域である。名取市から仙台市に続く山麓には，まず第1番富蔵山金昌寺が太白区富田にあり，第2番天苗山秀麓斎は名取市高舘吉田にあり，奥羽三十三観音の一つでもある。仙台市街には，第3番虚空蔵山大満寺が太白区向山に，第4番満谷山円福寺が若林区石名坂にあり，仙台三十三観音の一つでもある。仙台市西部の山地側には，まず第5番薬師山長泉寺が青葉区芋沢に，第6番飯富山向泉寺が太白区秋保町に，第7番の秀岩山興禅寺が青葉区熊ヶ根にある。

図9 御府内第79番清水山専教院

多くの他の札所同様に，小高い土地に位置する。音羽通りから東に上った古い商店などが残る住宅街にあるが，現在は本尊がマンション2階にまつられている。

治に由来する鬼退治が修正会で本堂の十一面観音を本尊として行われる一方，正月18日から26日のオフクデンが宗徒の坊で白山神を本尊として行われるという(内藤正敏，2001)。白山堂は現在1間四方の小堂であり，観音堂がはるかに大きい。

篦岳の北方，登米郡南方町本郷に，第10番大嶽山興福寺がある。大嶽山(41m)は迫川の右岸の水田地帯にそびえる比高35mの小山で，頂上の100mほどの平坦地に観音堂が建つ。坂上田村麻呂が東夷鎮圧を祈願して建立し，伊達綱村が再建して仙台藩十霊山の一つとされ羽黒山に属していたが，現在は篦峰寺末の天台宗寺院である。境内に天照大神，金比羅神社，二十三夜，古峯神社など多くの石碑がならび，寛政十三(1801)年の伊勢・秋葉巡参碑が建つ。

これらの札所はいずれも小高い位置にあり，類似の縁起や境内の夥しい石仏群をもつ。それらは古く諸神が祀られ，次に坂上田村麻呂による奥州鎮護と滅んだ氏族供養で観音が導入され，さらに熊野三山を中心とした修験の行場となり，西国霊場が写されていく経緯を示している。宗派も奈良仏教の法相宗から天台宗へ，さらに曹洞宗への転宗が認められる。

都市部の仙台三十三観音

一方地方霊場は平坦地にも展開する。仙台三十三観音は，広瀬川が仙台平野に形成した扇状地上にある仙台市街を中心に広がる(図8)。

札所は扇頂部から続くが，とくに集中するのは，仙台旧市街の周辺部である。とくに，仙台駅東方では北東から南西に断層が走るため付近はやや傾斜が大きく，東側が落ちている。この高台縁辺の宮城野区榴岡から若林区新寺にかけて，多くの寺院があり，その中に第12番から第18番の札所がある。

観音はこれら札所寺院では，多くは境内の観音堂に祀られている。榴岡にある第12番滋恩寺では半間四方，第13番金勝寺では三間四方，第14番の森城山大林寺と第15番愚鈍院では半間四方，第16番十劫山成覚寺では，二間四方の観音堂が建つ。

第14番の森城山大林寺には八塚古墳の一つが境内にあったように，古い祭祀施設があったことも考えられるが，同寺は伊達政宗に従って岩出山に移り，後に仙台の地を与えられて移転したものである。開基は伊達政宗にちなむものが多いが，一方曹洞宗だけでなく，天台宗，浄土宗，時宗などさまざまである。また，禅系寺院などの境内には，妙理堂や白山大権現，山神の石碑などが祀られる。第14番大林寺と第15番愚鈍院の観音堂には，昭和13(1938)年の「日支事変戦死者為追弔」と書かれた額がかけられている。

3．江戸・東京

開析谷と御府内霊場

東京には多くの地方霊場が開創されているが，東京では段丘化した扇状地に深い開析谷が刻まれており，札所の多くはこうした地形に規定されている。

江戸城外堀の四谷見付から西に延びる甲州街道は，脇を玉川上水が流れるように，台地上の高所を通っている。この街道南側には，約20mの深さの谷が入り，南東方の旧紀伊殿屋敷(赤坂御用地)一帯の窪地に続いている。この谷の南向き斜面一帯はかつて寺町といわれ，円通寺坂，観音坂，戒行寺坂，また東福坂(天王坂)の名を残している。

そこには御府内八十八ヶ所霊場の札所が多い。上流側より，第21番阿祥山東福院，向かいに第18番独鈷山光明寺愛染院，第83番放光山千眼寺蓮乗院，第39番金鶏山真成院がある。これら4寺はいずれも真言系である。周辺は中高層のアパートが多く，その間で寺院境内は広い墓地となっている。真成院には潮干十一面観世音菩薩がまつられるが，かつてこの辺は海岸で，潮の干満により観音像の台石が濡れたといわれる。また潮踏観音ともいい，四谷周辺は潮踏の里とよばれていた。同寺の開山は祈祷僧清心法印で，密門会本部がおかれ，江戸三十三所観音第18番，関東91薬師第13番の札所でもある。なおこの谷の対岸は南寺町寺地といわれるが，札所は第44番金剛山蓮華院顕性寺だけである。門前の御府内八十八ヶ所の石柱には，文久二壬戌(1862)年八月と記される。

甲州街道の北側の牛込では，神田川が作った北向き斜面，また弁天町から市谷柳町方面に侵入した神田川支谷の西向き斜面に，寺院が多い。そこに第31番照林山吉祥寺多聞院，北西の早稲田に第30番威盛院光松山放生寺，早稲田大学の北側に第52番慈雲山観音寺の札所が位置する。30番一帯は神田川沿いの北向き緩斜面で，ミョウガの産地であったという。

上記諸寺の開山はおよそ江戸初期である。放生寺

は高野山や安芸宮島などで修行した法印良昌により寛永十八(1641)年，観音寺は寛文十三(1673)年，多聞院は法印覚賢により寛永年間(1624-1629)の開山である。ただし，多聞院境内の「御府内八十八ヶ所開基 等大阿闍梨百五十年供養塔 大正十二年六月十二日」と「御府内八十八霊場開創第百五十年供養塔」の刻銘に基づくと，霊場の開創は1773年にあたる。また放生寺は隣接する穴八幡宮，高田八幡の別当寺であり，冬至前七日間に真言密教による観音の修法で除災招福祈祷した「一陽来福」という観音の御札を，冬至から星祭(二月節分)まで授与するなど，神仏習合の面をもつ。なお放生寺は江戸三十三観音第15番，観音寺は豊島八十八ヶ所第52番でもある。

神田川の北の小石川周辺では，東流する神田川に合流する，南流する支流がいくつか平行するため，台地が分けられている。その台地上に多くの寺院がみられる。まず音羽の谷が上流で二股に分かれ，その間の台地上に第87番神齢山護国寺，音羽の谷と茗荷谷間の小日向三丁目に第79番清水山専教院(図9)，茗荷谷と小石川の間の台地上の春日一丁目に第86番金剛山常泉院，小石川の左岸の本郷二丁目に第34番薬王山三念寺，さらに湯島一丁目に第32番萬昌山圓満寺，白山通りから不忍池を見下ろす東向き斜面の湯島二丁目に第28番宝林山霊雲寺がある。

いずれも真言宗で豊山派が多いが，圓満寺は御室派，霊雲寺は霊雲寺派本山である。専教院は延宝九(1681)年の開創である。護国寺には境内の墓地のほか，隣接して豊島岡墓地や雑司が谷墓地がある。茗荷谷付近には，多くの地蔵石像をまつる深光寺や宗四郎稲荷大明神のような，小規模な社祠が多く分布する。また護国寺は江戸観音第13番でもある。専教院では，平成12・13年ころからお参りする人が増えてきたといい，三念寺でも平成15年から道順をよく尋ねられるようになったという。

Ⅲ　東北日本とその周辺の社寺分布

1．主要神社の分布

北陸の糸魚川周辺では，水の神は古く周辺部に，勧請神の神明は各谷に，熊野はやや古く神明より谷の奥に，八幡は新しく海岸付近に分布するという(柴田 武・三石泰子，1974)。すなわち，海岸に沿って，また内陸の上流側から，人々が移動したり，文化が伝播するのにともなって，神社も変遷し，分布地域も異なってくる。こうした変化は，さらに霊場にもあてはまる。

霊場にかかわる神社はさまざまであるが，神社の分布は霊場の地域的差異とかかわるものと考えられる。著名神社の分布には，類似性が認められるものがある。実際，主要神社の都道府県別構成率分布をクラスター分析すると，6つの基本型が抽出される(Tagami,Y.，2002)。この基本型ごとに，主要神社の個々の位置を図示し，特色を概説する。

第1に，分布が全国的であるのは，稲荷社・熊野社・琴平社である(図10)。第2に，内陸に多いのは，諏訪社・十二社である。諏訪社は新潟平野に集中し，関東でも内陸の山寄りに多い。十二社はとくに新潟平野に多く，とくに山寄りに集中する。第3に，関東に多いのは，八坂社・日吉社である。八坂社，日吉社ともに，関東西部にとくに多い。天台系寺院の分布と似るところがある。第4に中部に多いものとして，八幡社がある。八幡社は内陸・海岸地方ともに多い。第5に中部に多いものに，さらに神明社・春日社がある。とくに神明社は北陸に多く，浄土系寺院の分布に似ている。第6に，中国に多いものおよび九州に多いものは，天満宮・住吉社である。住吉社の数は多くはないが，全域に分布する。

本論で対象としている東北日本とその周辺では，八幡社が広く分布する。また稲荷社は北部に多く，神明社は南部に多く，熊野社は内陸部に多い。奥州霊場でみられるように，札所寺院には熊野三山の石碑などがみられるが，熊野社の分布は，他にくらべてやや特異で，内陸の盆地部や山麓部に多い。

2．東北日本とその周辺の寺院宗派別分布

寺院も宗派により，霊場とのかかわりが異なる。宗派別に，個々の寺院分布を示す。それには，『寺院大観』(全国寺院大鑑編纂委員会，1991a，1991b)所載の，宗教法人の寺院を対象とする。寺院の位置は『ゼンリン電子地図帳Z5』より，確認する。また寺院の位置が表されない場合には，国土地理院の『数値地図25000(地名・公共施設)』より，大字・町丁レベルでの緯度・経度位置を用いる(図11)。

寺院の宗派別分布は，東北日本とその周辺のおよそ南西部では浄土系，北東部では禅系などが多い。

また平野部では浄土系，山地寄りでは禅系，天台系，真言系が多い傾向がある。これら東北日本とその周辺の寺院分布を比較すると，天台系・真言系寺院は，広域でみた場合にも，霊場の多い地域に位置することが示される。

ただし，東北地方では寺院宗派は，後世に修験や巫の徒の祠堂が宗派を称し本末を結んだものが多く，なおマイリの仏，修験法印，巫女の祈祷所が空隙に存在したという(及川儀右衛門，1957)。奥州三十三所の札所寺院にも，天台系への改宗がみられた。とくに一国規模の霊場の札所として，真言系寺院をはじめ，天台系や禅系の寺院が多く選ばれるが，同時に各札所は，およそ平野や盆地の縁にあたる山麓の，さらに岩や沢の傍らなどに位置することも多い。そのため札所寺院は，宗派を称する以前に，霊場としての要因をもつことが考えられる。

また東北地方では，室町後期に土豪勢力の台頭によって，とくに曹洞宗寺院が多数開創されたが，真宗や日蓮宗はふるわなかったという(及川儀右衛門，1957)。とくに仙台藩では曹洞宗寺院が圧倒的であり，仙台三十三所の札所寺院でも同様であるが，それ以外の宗派もみられた。そのため曹洞宗をはじめとする禅系寺院と霊場との結びつきは必ずしも深くないものとみられる。

3．地形と寺院宗派の進出

たとえば関東地方では，利根川沿いの平野部には真言系寺院が多く，西部の山地には禅系寺院が多くみられる。こうした寺院宗派の分布は，土地利用と比較してみると，まず地形と結びついている(図12)。また地形に加えて，進出の時代がかかわる。古くは天台系寺院が開かれたが，後に平野部を中心に真言系，山地を中心に禅系の進出および転化があり，さらに都市部を中心に浄土系，日蓮系の進出があったことによると考えられる。

東京の23区付近でも，寺院分布と地形との間には，関東平野の場合と類似の傾向がみえる。目黒川に沿う台地端には天台系寺院が残る一方，荒川低地側には真言系寺院が多い。禅系寺院は，江戸城周辺に多い。浄土系，日蓮系寺院も，禅系同様に江戸城周辺部に多い。一般に台地の縁や山麓付近など傾斜地に寺院が多いが，東京では江戸城を中心にして，その周囲に寺院が集中している。これは後述のように，江戸開府および大火後の都市整備による。江戸の郊外は，それ以前の寺院分布を示すと考えられる(図13)。

江戸城西方の四谷には，かつて北寺町・寺町・南寺町に百寺があったという。四谷付近の切絵図(新宿区教育委員会，1983)では，延宝七(1679)年には先述の御府内八十八ヶ所の東福院，愛染院が記され，嘉永三(1850)年には，さらに同札所の蓮乗院，真成院のほか，谷の両岸に二十余寺が描かれている。このように，新たな開基の場は地形にもとづいていた。

四谷の北方，牛込付近の切絵図(新宿区教育委員会，1982)では，札所の多聞院は，延宝七(1679)年にも記されている。この頃には周囲に田が多いが，嘉永七(1854)年には穴八幡付近まで屋敷が広がる。さらに，早稲田から南に谷が入るが，神田川の谷との間に，穴八幡と別当の放生寺がある。都市の拡大とともに郊外に開基されるため，そのころに優勢な宗派が集中することが考えられる。

4．藩政期の寺町の形成の影響

旧四谷区では徳川以前の開基は12寺のみで，寛永(1624-1644)の江戸城総構築造の際，麹町あたりなどから移ったものが多いという。先述の札所寺院では，慶長十六(1611)年に蓮乗院が麹町七丁目から，寛永十一(1634)年には愛染院が貝塚辺から，東福院が麹町九丁目横町から，顕性寺が牛込門外から移ってきた(四谷区役所，1934)。旧牛込区でも徳川以前の開基は3寺のみで，麹町辺から11，平川村から6，赤坂から5，その他から8寺が移転し，ほかにも地元で開基した。1657年の明暦の大火後も，霊岸島，八丁堀，神田方面から移転した(東京市牛込区役所，1930)。

江戸のみならず城下町では一般に，寺町が形成されている。寺院はそれのみならず，周辺の町と結びつく。たとえば，音羽護国寺，深川八幡，根津権現には岡場所があったほか，牛込総鎮守の赤城神社，市谷八幡などにも岡場所あるいは水茶屋があって，周辺は賑ったという。移転した諸寺院により寺町が形成されると，地域の発展のもととなった。

寺町の繁栄は観音や八幡などで顕著であるが，これにはその習合寺社が伴われている。先述のように江戸開府のころの新たな開基は浄土系や日蓮系が多かったが，天台系や真言系寺院は，寺社地の主要な

位置を占めていた。霊場はこれらの寺院を中心としており,寺院宗派の大勢とは異なる位置で，巡拝が行われていたものと考えられる。

Ⅳ　霊場の複合的性格の検討

1．霊地と自然的基盤

前述のように，霊場には特有の地形がみられる。五穀豊穣や風水害などを契機とした自然への畏敬の念や，祖霊の住む里山の他界観などは，さらに山岳信仰にもおよぶ。そうした山は霊地となり，それらが霊場の開創の礎となったと考えられる。

ただし地方霊場は，高山のない平野部にも開創されている。先述の仙台三十三観音は，仙台市街に広がる。とくに分布が多いのは，山麓・河川沿いのほか，台地の縁にあたる。寺地の配置の影響もあるが，札所寺院の基礎には，特徴的な微地形がみられる。そのことは都市部に限らない。埼玉県南部の富士見市にある富士見観音は，武蔵野台地の縁に分布しており，荒川低地にはない。また関東平野の利根川流域には，多くの大師霊場が分布する(小嶋博巳，1996)。そこは基本的に真言系寺院の多い地域であるが，それらの霊場は水田ではなく，畑などの多い地域にあたる(図14)。すなわち，台地などにあたる地域を中心としている。社寺として成立の如何にかかわらず，岩・木・水のある景観・舞台は，霊場の大きな要因となる。

2．霊場と宗教的基盤

先述のように奥州三十三観音霊場のある仙台平野周辺は，山麓や海岸部なども禅系寺院が優勢である。その寺院宗派は，曹洞宗・臨済宗が大半であるが，天台系7，真言系6であり，周囲にくらべて全体に占める割合が高い。また第1番紹楽寺，第8番梅渓寺，第9番篦峰寺，第10番興福寺にみられるように，多くは修験の寺院である。修験は山岳と結びつくため，霊場に修験の寺院が多いことは，自然的基盤にも対応している。

霊場がとくに多い山形県でも，霊場はとくに天台系・真言系寺院，また熊野社の多い地域に位置する。大師霊場は真言系寺院を基本とするが，観音霊場は修験との結びつきがより明瞭である。一方北陸では霊場が少なく開創も遅いが，そこには浄土系寺院，また神明社の分布が卓越している。

霊場と縁の深い観音をはじめ，地蔵や不動などが随所にまつられているが，観音と地蔵と不動は，母・子・父の家族にもなぞらわれている。これら諸仏は，習俗・民間行事を通して，地域の共同体の中での役割を果たす。霊場へはこうした民間信仰に，寺社も含めた信仰複合が影響をおよぼしている。

さらに霊場は寺院との結びつきが強く，教線の拡大や寺町の形成なども霊場開創にかかわる。寺院は，城下町では防御のためとくに山の手側に，門前に歓楽街を伴うため郊外に，配置が多い。地域住民が祀る神社に対して，寺院は無住では機能が低いため，僧による開山適地も影響する。これらは，さらに霊場に影響することとなる。

3．巡拝と社会的基盤

霊場を人々が巡拝する中で，講を作られることもある。ととえば鹿島郡鹿島町の碁石ヶ峰山麓の，能登三十三観音霊場第11番正霊寺には，昭和45年の御詠歌講一同の碑が建つ。巡拝は修行としての個人的行為でもあるが，さらに講などの地域の集団的行為としては，地域における祈願行事の性格をもつと考えられる。

先述の船峅山三十三観音霊場の帝龍寺は，大宝二(702)年の開基と伝えられ，後世に真言宗寺院になった(図15)。境内の堂に，正安二(1300)年に越前で作られた十一面千手観音菩薩像を祀る。隣接する姉倉比売神社の本地仏である虚空蔵菩薩が，同寺の本尊である。直坂(すんざか)のお宮さん，馬峅谷(まくらだん)のお宮さんなど5つの神社に，帝龍寺住職が社僧として勤めていた。近年は神職がかわるようになったが，一月元旦にはお宮に行き，厄年の人の祈願などを行うという。

帝龍寺では8月18日に観音まつりが行われ，端山に祀られた三十三観音を，地域の人たちが御詠歌を奉唱しながら巡る。帝龍寺住職が奉祀する船峅野の神社の一つ，級長戸辺神社・不吹堂では風神や水神を祀るように，帝龍寺では多くの神仏が信仰の対象とされており，三十三観音巡拝も，こうした地域の祈願行事の一環と考えられる。

4．霊場の性格

霊場の一例として，富山県下新川郡朝日町南保の

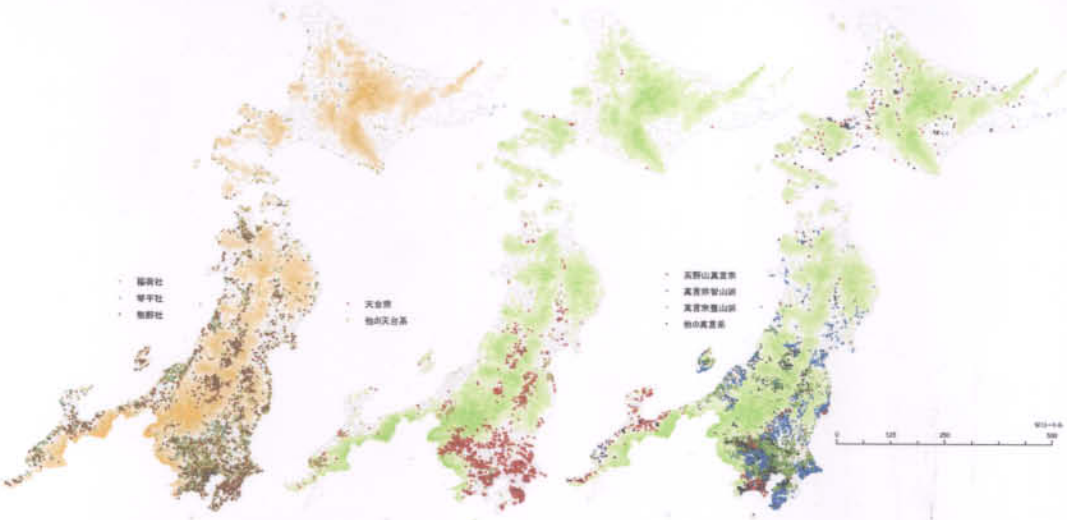


図10 東北日本の主要神社分布

全国系の諸社

稲荷社，熊野社，琴平社は，全国的に分布がみられる。熊野社は東北地方ではとくに内陸部に多く，山形・福島・会津盆地に集中し，関東地方では房総半島に多い。稲荷社や琴平社は内陸にも海岸付近にも多く分布している。なお本図他の分布図は「ArcMap8.1」を利用して作成した。

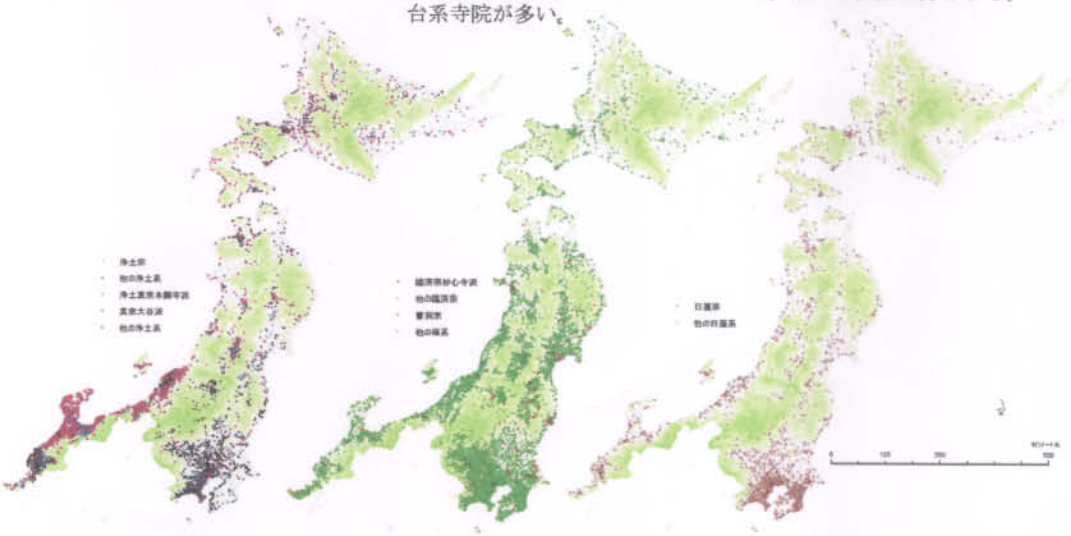
図11 東北日本の寺院宗派別分布

-a) 天台系

天台宗，他の天台系の寺院は，関東地方から東北地方南部に大きな中心がある。東北地方ではとくに山形・福島・会津の内陸の盆地に多い。関東地方では，群馬の赤城・榛名間，鹿島・香取，千葉の清澄山北方に集中する。福井では天台宗より他の天台系寺院が多い。

-b) 真言系

高野山真言宗，真言宗智山派，真言宗豊山派，他の真言系の寺院は，関東地方に集中する。利根川流域に豊山派，西方の関東山地寄りに智山派が多い。千葉では内房に多い。高野山真言宗は，西寄りに多い。真言系寺院は天台系寺院とは，隔たる位置に分布する。



-c) 浄土系

浄土宗，他の浄土宗，浄土真宗本願寺派，真宗大谷派，他の浄土系の寺院は，北陸地方に集中する。関東地方では，東京都心から神奈川にかけて多い。東北日本では真宗大谷派寺院が多い。

-d) 禅系

臨済宗妙心寺派，他の臨済宗，曹洞宗，他の禅系の寺院は，北日本にきわめて多い。東北地方でとくに卓越している。関東地方では西の山寄りで多く，とくに曹洞宗寺院が多い。

-e) 日蓮系

日蓮宗，他の日蓮系の寺院は，関東地方に集中する。それも南関東に多い。千葉県では房総半島南部は日蓮宗，九十九里以北は他の日蓮系寺院が多い。

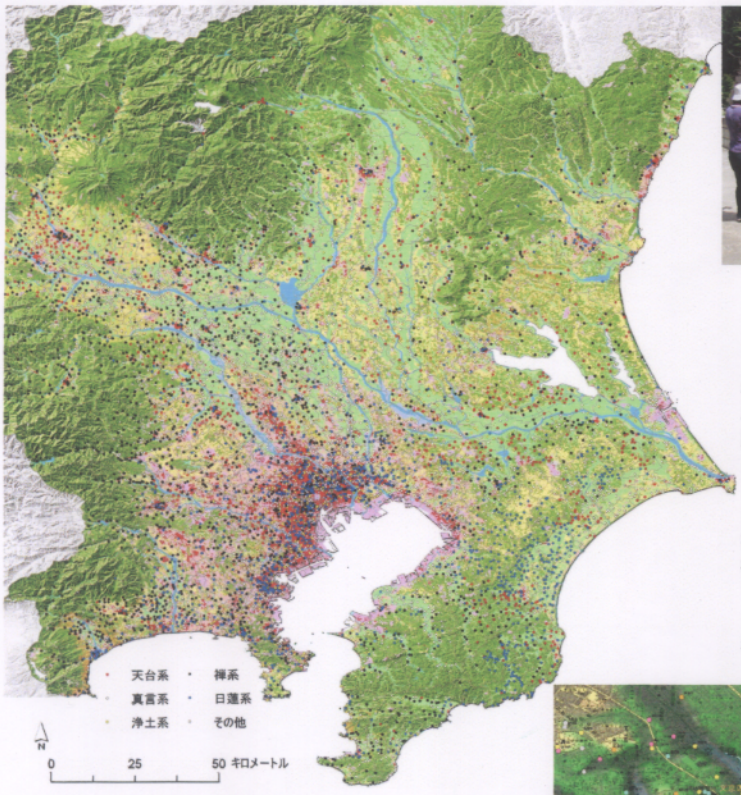


図12　関東地方の寺院分布と土地利用

天台系寺院はとくに赤城山・榛名山の麓や，利根川下流部の丘陵端，房総の丘陵の麓に位置する。一方真言系寺院は，利根川・江戸川流域の水田地帯を中心に分布する。また浄土系寺院は，都市部に多い。禅系寺院は，関東平野の水田地帯にもみられるが，表秩父か大山・箱根の山麓付近で分布が卓越している。日蓮系寺院は，房総半島を除けば都市周辺部に多い。

なお本図および図14のベースマップは，国土地理院の昭和51年土地利用メッシュから作成した。

図15　船峅寺家の観音まつり

船峅三十三観音霊場を御詠歌を奉唱して巡拝する。一部は帝龍寺本堂内の三十三観音の前で行われ，順次札所の観音の納札を集めて供えて住職が「唱え奉る西国第二十八番成相寺聖観世音菩薩の御詠歌に…」のように先導した後，手に持った鈴と鉦で，西国霊場写しの御詠歌を奉唱する。札所ごとに2分半ほどを要する。この図は境内にある第三十三番観音前での納めの奉唱である。　（平成16年8月18日）

図13　東京都心の寺院宗派分布

寺地は谷中，上野，浅草，深川，芝，高輪，四谷，牛込，千駄木などにとくに集中し，それらは現在の都心部の6区に当たる。江戸開府後に外堀内の寺院は外堀外に移転し，また新たに開基した寺院も多い。とくに浄土系，日蓮系や禅系の寺院が多い。真言系や天台系の寺院は少ないが，上野寛永寺付近にあり，これは江戸城の鬼門にあたることによる。

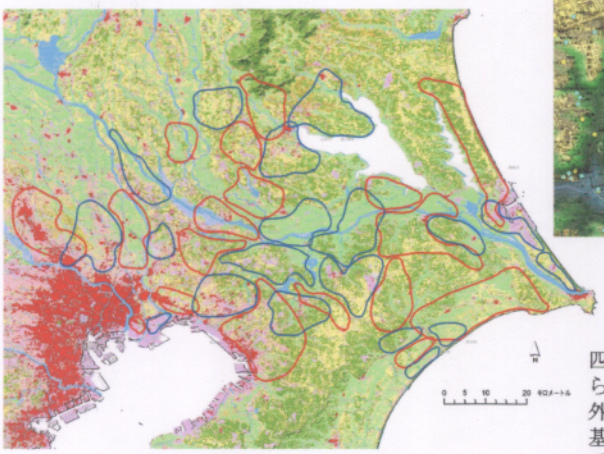


図14　利根流域の大師霊場

枠内が各大師霊場の範囲を示す。各位置は，小嶋博巳(1996)による。

大同山清水寺(せいすいじ)は，北陸白寿霊場の第33番，留めの札所である。越中八十八ヶ所霊場第84番札所として明治時代まで盛んであったといい，御朱印が残されている。源平以降の山城遺跡である横尾城の南に続き，黒部川扇状地を見おろす位置にある。先述の朝日町境の護国寺とかかわりが深い。鎌倉以前の毘沙門天像が残され，また境内には地蔵の石像群が安置される。高野山真言宗で，周辺の同寺の末寺の多くは，浄土真宗に転派したという。

寺院に観音・勢至菩薩を脇仏とした弥陀三尊がまつられ，さらに五如来や卒塔婆上部が五輪塔を形成するのは五体観に基づくという。すなわち，地，水，火，風，空によって世界全体が現され，祈願にもさまざまな神仏，森羅万象を対象にすることとなる。霊場には観音をはじめ，地蔵，不動などの諸仏が祀られるが，こうした世界観を反映している。

また八十八ヶ所霊場は，弘法大師また真言宗がかかわるが，その加持祈祷は効果も認められ，現世利益に意味があるという。こうした寺院では来世の極楽往生とは異なり，人生の悩みを捨て生きる力を教えられるといわれ，現世が強調される。古い霊場札所は修行場も多く，こうした山中では自ら全てを整えることが必要であり，現在の重視にもつながると考えられる。

V　おわりに

本論では東北日本とその周辺の地方霊場について，若干の事例について景観などの現地調査を実施した。また東北日本とその周辺の著名神社および寺院の宗派別分布を明らかにし，霊場と比較した。さらにそれらにもとづいて，霊場の複合的性格について検討した。主要な成果は以下の通りである。

1）北陸地方での山岳，国境，山麓，海岸などの霊場では，参詣路の分岐，海岸の小山や小島，里山の尾根などにおいて，類似した札所景観がみられた。

2）東北地方での霊場は，平野部では小高い山の頂上などに札所があって修験社寺であることが多く，市街地付近の霊場でも札所は台地端に位置する例が多くみられた。

3）江戸・東京の霊場は，武蔵野台地東縁の開析谷付近では，札所の多くは南向きの傾斜地にみられ，また江戸の都市建設に伴って形成された寺地がかかわった。

4）東北日本とその周辺では，霊場は著名神社の中のとくに熊野社とむすびつきがみられた。

5）東北日本とその周辺では，寺院宗派では，とくに真言系や禅系寺院とむすびつきがみられた。

6）寺院分布はとくに傾斜地や小高い地などの地形に影響を受け，それは霊場にも影響した。

7）近世初期には新たに城下町などが整備され，郊外に形成された寺町は，都市の札所の主要な部分を占めるようになった。

8）山麓や小山などの地形のところに，霊地が選ばれ，それらは霊場の礎となった。それらの地は天台系や真言系などの寺院や修験の行場などとなり，霊場の札所に選ばれた。さらに都市建設でも霊場は変容し，巡拝にも地域社会の組織がかかわった。霊場の札所寺院また巡拝での祈願では，とくに現世が重視された。

糸魚川周辺の175集落から採集された語彙について分析すると，神社の分布と言葉の分布は類似するという。それは，背後に共通の要因があるためであり，同一の伝播をさせた集落の文化的上下関係によるという(柴田 武・三石泰子，1974)。本論のように霊場を対象としても，地域の共通的基盤として，自然的，宗教的，社会的基盤から，その複合的性格を捉えることができると考えられる。

もともと巡礼では札所寺院のほか霊山も対象であり，巡礼には山での修行の要素が含まれる。しかし近代以降では，それらは広く山行の対象となり，霊山は身近になると同時に，その意味も変わった。また近年は，若者達が「自分探し」などで霊場を巡拝することが多いといわれる。霊場の複合的性格も変容しつつあるが，そうした分析は今後の課題である。

謝　辞

富山，石川，宮城，東京での調査では，現地で多くの方々に多大なご配慮をいただいた。聞き取り調査では，貴重なご教示をいただいた。記して感謝する次第である。

文　献

及川儀右衛門(1957)：寺院分布に見る中世東北地方の佛教伝播．岩手史学研究，26，1-11.

小嶋博巳(1996)：利根川下流域の新四国巡礼－いわゆる地方巡礼の理解に向けて－．真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣出版，274-311，(初出：成城文芸113/114，1985).

柴田 武・三石泰子(1974)：同一文化を反映する神社分布と語彙分布．日本民俗学，92，29-42.

嶋 二郎(1999)：奥羽順礼記－(1)消された観音霊場・奥羽三十三所－．清水寺研究，1，21-69.

新宿区教育委員会(1982)：『地図でみる新宿区の移り変わり－牛込編－』新宿区教育委員会，503p.

新宿区教育委員会(1983)：『地図でみる新宿区の移り変わり－四谷編－』新宿区教育委員会，615p.

全国寺院大鑑編纂委員会(1991a)：『全国寺院大鑑 上巻』法蔵館，1018p.

全国寺院大鑑編纂委員会(1991b)：『全国寺院大鑑 下巻』法蔵館，1022～1999p.

田上善夫(2003a)：北陸および広域における霊場と風祭の分布とのかかわり．富山大学教育学部紀要，57，59-73.

田上善夫(2003b)：地方霊場の立地環境と展開について．富山大学教育学部研究論集，6，35-48.

田上善夫(2004a)：地方霊場の開創とその巡拝路について．富山大学教育学部紀要，58，159-172.

田上善夫(2004b)：日本海中北部の地方霊場の開創と寺社分布のかかわり．富山大学教育学部研究論集，7，35-48.

田上善夫(2004c)：富山県の霊場とその巡拝路の特色．富山県地学地理学研究論集，11，(印刷中).

立山町(1977)：立山信仰．『立山町史 上』，637-897.

立山町(1984)：立山参道石塔並びに石仏群．『立山町史 別冊』，238-242.

東京市牛込区役所(1930)：『牛込区史』牛込区役所，603p.

内藤正敏(2001)：鬼の神事に隠された“東北”－箟峰寺の正月行事．東北学(東北芸術工科大学東北文化研究センター)，5，364-381.

藤田定興(1997)：東北における三十三観音信仰と霊場 一．福島県歴史資料館研究紀要，19，1-16.

山瀬晋吾(1995)：米林勝二論［Ⅱ］－一人の彫刻家における研究と創作の軌跡－．富山大学教育学部紀要，47A(文科系)，25-35.

四谷区役所(1934)：『四谷区史』四谷区役所，737p.

Tagami,Y.(2002): Some characteristics of shrine distribution in Central Japan. Geogr. Repts. Tokyo Metropol. Univ. 51-60.